kikkoman

おいしい記憶をつくりたい。

キッコーマングループの

おいしい記憶かるた

©Kikkoman Corporation ©Koyama Tomoko



あ

あふれる具材(ぐざい)が
最高(さいこう)、わが家(や)の
「とろたく」

【あふれる具材が最高、わが家の「とろたく」】

家族でお寿司屋さんに行くと必ず注文する「とろたく」。たくあんのシャキシャキ食感がたまらなくて、同じものを何度も注文してしまうほど、みんなの大好物。ある日、子どもが「このお寿司、おうちでつくりたい！」と言い出し、近くのスーパーへ。「とろ」「たくあん」「すし酢」を買って、家で細巻きづくりに挑戦。子どもと一緒にわいわいつくった細巻きは、形もバラバラで、ネタの「とろ」と「たくあん」がはみ出している個性あふれる出来映え。でも、そんな手づくりの「とろたく」は、お店で食べるよりも何倍もおいしい！今では、家での"寿司パーティー"がすっかり定番に！

タクアン・トローニ（ＫＦ）



い

「いつもの
ごはん」が
「母(はは)の味(あじ)」に
変(か)わった日(ひ)

【「いつものごはん」が「母の味」に変わった日】

大学に入学し、一人暮らしを始めるとき、母が引っ越しの手伝いに来てくれて、たくさんの料理を冷蔵庫につくり置きしてくれました。母が帰ったその晩、初めての一人暮らし、あっという間にさみしくなり、そのつくり置きを食べました。ぬくもりと優しさを感じ、「ああ、これが母の味か」と、しっかりとその味を覚えた瞬間でした。

シンガポール大好き（ＫＣ）



う

ウガリと
ニャマチョマ
ケニアと私(わたし)の
架(か)け橋(はし)に

【ウガリとニャマチョマ　ケニアと私の架け橋に】

初めてのケニアで出会ったウガリは、目の前にふわりと置かれた白いかたまりでした。手でちぎってニャマチョマと一緒にいただきます。最初は少し戸惑いましたが、隣で笑いながら食べる現地の人たちに教わりながら真似をしました。指先で感じるやわらかさ、口いっぱいに広がる素朴な味、そしてみんなで囲む食卓の温かさ。気がつけば、その食事は私の心に残る特別な"おいしい記憶"になりました。

Ｎｉｃｈｏ（ＫＣ）



え

エベレストを
おかずにする
おみそ汁（しる）

【エベレストを　おかずにする
おみそ汁】

エベレストのふもと、冷たい風が頬を刺す朝。水筒からお湯を注ぎ、持参したインスタントみそ汁に注ぐ。湯気とともに立ちのぼる香りに、遠く離れた日本の台所がふと浮かんだ。ひと口すると、体の芯までしみ渡る温かさ。塩気と旨みが、標高四千メートルの空気に溶けていく。仲間と顔を見合わせ、無言で笑った。言葉はいらない。ただ「おいしい」が、心を満たしていた。あの一杯は、寒さも疲れも、すべてを包み込んでくれた。みそ汁が、旅の中で最も深い記憶になった瞬間だった。

ガンディー（ＫＦ）



お

「おかわり」
五回目（ごかいめ）、
すき焼（や）き奉行（ぶぎょう）の
父（ちち）ニヤリ

【「おかわり」五回目、
すき焼き奉行の父ニヤリ】

私が子どもの頃、家族全員が滅多に揃うことのない食卓をひとつにしてくれたのが、すき焼きだった。

日頃から厳格だった父は、勢いよく食べ進む私の様子を見ても、ほとんど表情が変わらない。時折「もう一杯どうだ？」と呟く父に「おかわり」と頷く私。母は、小さなご飯茶碗に、繰り返し中盛りご飯を盛りつけてくれた。その日は、おいしくて嬉しくて、気づけば六杯も食べ進んでしまっていた。五回目の「おかわり」を発した頃だったと思う。シャイな父の、ほんの一瞬だけゆるんだ表情を私は見逃さなかった。

そして、私のご飯茶碗は、この日を境に巨大化した。

サッカーマン（ＫＣ）



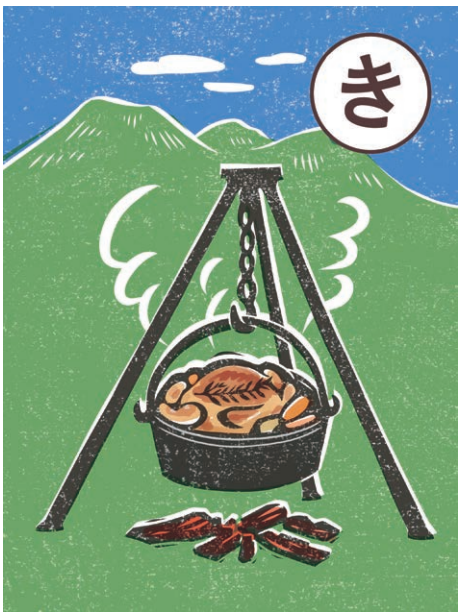
か

かつお節（ぶし）
削（けず）れど削（けず）れど
たまらない

【かつお節　削れど削れどたまらない】

子どもの頃、かつお節を削るお手伝いが大好きだった。いい香り。薄〜く削って、ちょいつまみ食い、長〜く削って、ちょいつまみ食い。もうできた？いつまでたっても箱の中には、なかなかたまらないのでした…

とんとん（ＫＣ）



き

キャンプで
食(た)べた
鶏(とり)の丸焼(まるや)き

【キャンプで食べた鶏の丸焼き】

子どもたちがまだ親の遊びに付き合ってくれた頃、我々家族はよくキャンプに出かけていた。バーベキューもよくやったが、なんといってもダッチオーブンで焼いた鶏の丸焼きが格別だった。塩とこしょうを擦り込んで、おなかにニンニクとご飯を詰め込むのがわが家流。隙間にはまるごとの玉ねぎやじゃがいもを並べて一緒に焼けば完成だ。皮はパリッと肉はやわらかく、とてもジューシーで見た目もワイルド。まるごと野菜もホクホクで子どもたちも夢中で食べていた。自然の中で食べる料理は普段の疲れを癒し、心を豊かにしてくれる。子どもたちはすっかり大きくなって一緒にキャンプに行くことはなくなったが、今でも何かの折に話題に上る。きっとおいしい記憶になっているに違いない。

さすらいのキャンパー（ＫＢＳ）



く

黒豆(くろまめ)は寝(ね)て待(ま)て

【黒豆は寝て待て】

わが家はお正月に限らず黒豆を煮ています。ふっくらツヤツヤなおいしい黒豆をつくるポイントは焦らず、触らず、まさに寝て待て。忙しい現代に「時短」も便利ですが時にはゆっくり時間をかけて。

たまちゃん（ＨＳＣ）



け

ケーキ争奪(そうだつ)
大(だい)じゃんけん
大会(たいかい)

【ケーキ争奪　大じゃんけん大会】

幼い頃、父がたまにケーキを買ってきてくれました。父母と男三人兄弟で、好きなケーキをじゃんけんで取り合うのが恒例でした。あんな真剣に取り合いするなら同じ種類を買ってくれればよかったのにと思いますが、家族の真剣勝負として忘れられないよき思い出です。

Ｎ・Ｉ・（ＫＣ）



こ

こたつでみかん
幸せ二倍（しあわせにばい）

【こたつでみかん　幸せ二倍】

私は冬のこたつが大好きです。寒い寒いと言いながら、ぽかぽかのこたつで家族みんなで食べたみかんがずっと心に残っています。みかんの香りと、こたつのぬくもり。そして、家族みんなのおいしい笑顔。冬の思い出は、いつもこの組み合わせ。「こたつでみかん」は、私にとって幸せが二倍になる魔法の時間でした！

しょうたろう（ＫＦ）



さ

さすがに満足（まんぞく）！
フライパン
サイズの
ハンバーグ

【さすがに満足！
フライパンサイズのハンバーグ】

学生時代サッカー部でした。毎日部活で、帰宅時は腹ペコでした。そんな私の好物はハンバーグ。いつも『少ない！小さい！足りない！』と言う私に、ある日母はフライパンいっぱいの超デカハンバーグをつくってきました。さすがに全部が私の分ではなく、家族でシェアでしたが、あの時のインパクトと母のドヤ顔は今でも思い出します。

機動閃士（ＳＫＣ）



し

しょうゆ
ひとたらしが
決め手（きめて）です

【しょうゆひとたらしが決め手です】

夏休みや冬休み、母方の実家に行くとおばあちゃんがお皿いっぱい山盛りにつくってくれた、「おまんじゅうの天ぷら」。初めて見た時は恐々（こわごわ）口に運びましたが、これがとってもおいしい！衣がゴツゴツした不格好なまんじゅうの天ぷらに、ちょっとしょうゆをかけて、甘じょっぱく食べるのが大好きになりました。今でも時々食べてほっこりする、思い出のスイーツです。

雪（ＫＣ）



す

すり鉢で
枝豆潰して
ずんだ餅

【すり鉢で枝豆潰してずんだ餅】

枝豆が大量に出回ってくる夏休みの子どものお手伝いのひとつは、すり鉢で大豆をすり潰し、砂糖と料理酒を少し足してつくる「ずんだづくり」でした。母親が白玉をゆでて、冷やしたあとにずんだをかけて食べるのが楽しみでした。

ゆっくりドンキー（NKC）



せ

セミの声
ききながら
祖母の
ところてん

【セミの声ききながら　祖母のところてん】

子どもの頃、毎年夏休みのはじめに祖母の家へ行くのが楽しみでした。到着するとすぐ、冷たい麦茶と一緒に出てきたのが手づくりのところてんでした。天草から煮出してつくったというそのところてんは、突き器で細く押し出されていて、ガラスの器に盛られていました。酢じょうゆと練りからしが添えてあり、つるんとした冷たい食感と、さっぱりとした味が暑さをやわらげてくれました。セミの声が響く中、縁側でところてんを食べている時間が、夏休みの始まりを感じさせる合図のようでした。

K・Y（BC）



そ

そば湯割り
湯気にまぎれて
信州の夜

【そば湯割り　湯気にまぎれて　信州の夜】

長野に住んでいた頃、仕事帰りにふらりと立ち寄る居酒屋がありました。冷えた体をそば焼酎のそば湯割りでじんわりと温めながら、湯気の向こうに見える店主の笑顔や、隣の席の常連との何気ない会話が心地良く、まるで第二の家のような場所でした。締めには、香り高い手打ちそばをするのが定番。そばの風味と、そば湯のやさしい甘みが、信州の夜の静けさと溶け合って、心までほぐれていくようでした。あの頃の一杯は、ただの酒ではなく、日々の疲れを癒す「ご褒美」だったのかもしれません。

しんたろ（KF）



た

「大将！」と、
呼ばせて寿司を
握った日

【「大将！」と、
呼ばせて寿司を握った日】

娘が小さい頃から、月に一回は家で寿司を握っています。かつては「今日はパパではなく大将と呼びなさい」と言い聞かせてからやっていました。子どもたちも「おしながき」をつくったり、色々演出を楽しんでいました。最近はもう呼んでくれませんが、寿司づくり自体は今もやってます。

亀寿司（ＳＦ）



ち

チャルメラの
音を聞いて
作業中断

【チャルメラの音を聞いて作業中断】

結婚した夫の実家は桃農家。結婚したての頃は家族で夜遅くまで桃詰め作業をやっていたこともありました。そんな時作業場の外からチャルメラの音が…これは行くしかない！チャルメラの車を呼び止めて、作業を中断してみんなで作業場でラーメンをすすりました。疲れた体にしみいるおいしさ。みんな笑顔でした。懐かしい想い出です。

ガーネット（ＭＷ）



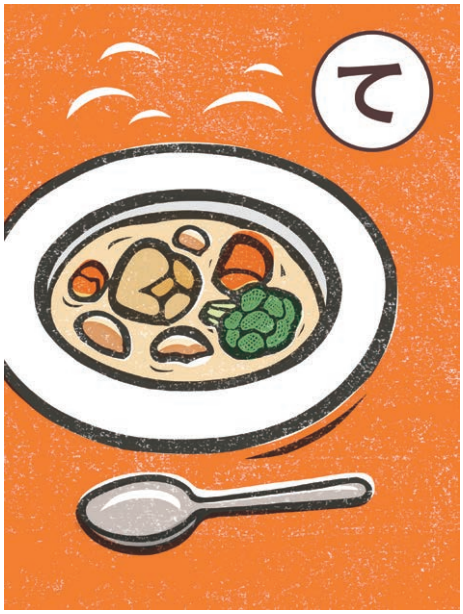
つ

つつじの蜜
吸う学校帰り

【つつじの蜜吸う学校帰り】

小学校の帰り道、お腹が空いてつつじの蜜を吸っていました。薄甘いだけの味ですが、花によっては中々の甘さを披露してくるものもあり、そのポテンシャルに驚かされたものです。ある日マンションの花壇の前を通りすぎると「やべ、行くぞっ」と少年たちが走り去っていきました。花壇の下にはつつじの花がたくさん落ちていました。褒められたことではありませんが、昭和生まれから現代の小学生まで、多くの子どもの心には、密かにつつじのおいしい記憶があるのではないかと思います。つつじ、ありがとう。食べ捨てて、ごめん。

ベテラン流れ星（元祖）（ＫＦ）



て

手伝いたい！
娘とシチューを
つくった記念日

【手伝いたい！
娘とシチューをつくった記念日】

「料理のお手伝いがしたい」娘が急に言い出しました。学校の宿題でも出たのか聞くとそうではなく、両親が料理をつくっている姿を見て、やりたくなったそう。一緒に買い物に行き、食材を買い、慣れない包丁を使い最初から最後まで頑張ってつくってくれました。野菜の形はいびつで、すこし焦げているところもあり。でも頑張ってつくってくれたこと。料理を進んでつくってくれたことは何にもかえがたく、クリームシチューを食べたときの心と体が温まったことは記憶からなくなることはないでしょう。すごくおいしかったよ！

SK（KF）



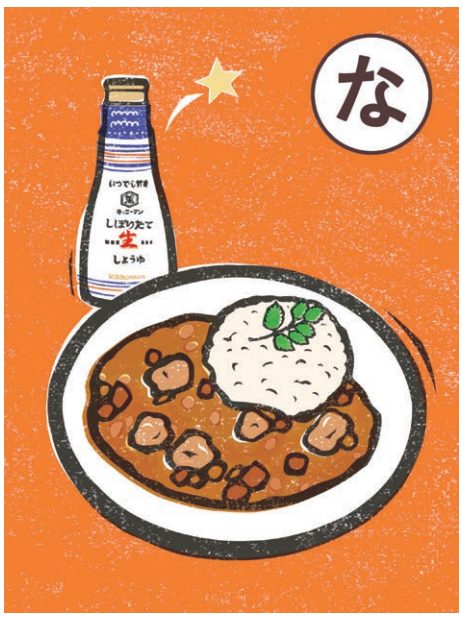
と

友達と食べる
フリッケンダール

【友達と食べるフリッケンダール】

オランダに住み始めて三年。言葉も文化も違う中、親友ベンとの出会いが僕の世界を広げてくれた。初めて食べたオランダ名物フリッケンダールは、ベンの家で出された塩辛いソーセージ。その味は、彼と一緒に食べたからこそおいしかった。スーパーの自動販売機で買ったものは同じはずなのに、なぜかおいしくない。やがて気づいたのは、食べ物の味には「誰と食べるか」が大きく関係しているということ。日本では経験できなかったこの発見は、海外生活の中で得た大切な宝物だ。

ら王（KC）



な

生しょうゆ
スパイスカレーの
隠し味

【生しょうゆ
スパイスカレーの隠し味】

時間をかけてつくるスパイスカレー。ヨーグルトに漬けた鶏肉、炒め玉ねぎにスパイス、デルモンテ基本の完熟トマトソース・・最後の隠し味はいつでも新鮮しぼりたて生しょうゆ、味全体が締まります。

TAWASHI（KFT）



に

西日(にしび)が差(さ)す
校庭(こうてい)で
飲(の)んだサイダー

【西日が差す校庭で飲んだサイダー】

私が通っていた中学校・高校には自販機があったため、放課後には校庭でサイダーを飲んで級友と色々なことを話しました。勉強のこと、趣味のこと、部活のこと、たまにはどうしようもなくくだらないことで腹を抱えるくらい笑い合いました。そんな何気ない、それでいてかけがいのないひとときを仕事終わりの夕焼け空が今でも思い出させてくれます。

TK（KF）



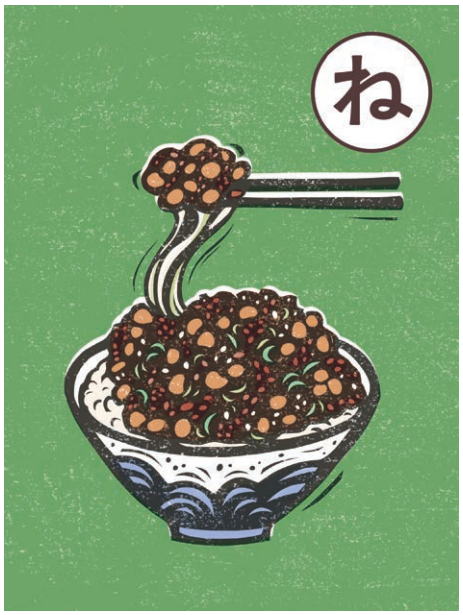
ぬ

ぬか床(どこ)は、宝箱(たからばこ)！

【ぬか床は、宝箱！】

子どもの頃、母が大事にしていたぬか床に手を入れて、ぬか漬けを掘り起こすのが妙に気に入っていました。時々、忘れられた古漬けを見つけると、宝を見つけた考古学者のように、なぜかとてもうれしかったの覚えています。

インディ（KF）



ね

ねばねばパワー
ひき肉(にく)・にんにく
「スタミナ納豆(なっとう)」

【ねばねばパワー
ひき肉・にんにく「スタミナ納豆」】

遊び疲れて玄関を開けると、むわっとした夏の空気に、香ばしいにんにくの香りが混ざってきた。キッチンでは、おばあちゃんがいつもの「スタミナ納豆」をつくっている。炒めたひき肉とにんにく、ねぎを納豆と混ぜて、ご飯にのせる。ひと口食べれば、汗をかいた体に元気が戻ってくる。「暑い夏はこれで乗り切るんだよ」風鈴の音に重なるおばあちゃんの声を思い出す。たくさん遊んだ日ほど、この味がしみた。

OK（NKC）



の

ノーサイドの
あとに仲間(なかま)と
焼肉(やきにく)を囲(かこ)んだ夜(よる)

【ノーサイドのあとに
仲間と焼肉を囲んだ夜】

高校生活最後のラグビーの試合に敗れ、涙と悔しさで言葉も出なかった。ロッカーには、汗と涙の匂いが静かに漂っていた。胸に残ったのは、悔しさ、虚しさ、そしてすべてが終わってしまったという喪失感。そんな僕らを、保護者たちが焼肉店へ連れて行ってくれた。ジュウジュウと焼ける音、立ちのぼる煙、香ばしい匂い。誰かが「うまっ」と笑い、少しずつ会話が戻ってくる。隣にいる仲間の顔を見て、ここまで一緒に走ってきたことが誇らしくなった。勝てなかったけれど、みんなで囲んだ焼肉は、心にしみる感謝の味だった。

もろが（ＫＣ）



は

ばあちゃんの方(ほう)が
お子(こ)さまランチ

【ばあちゃんの方がお子さまランチ】

小学校の二年生ぐらいだったかな。ばあちゃんと二人で福岡の岩田屋の大食堂でお昼ごはんを食べました。ボクは小さい頃からうなぎが大好き。ばあちゃんが何でもいいよというので、ボクはうな重を頼みました。ばあちゃんは、じゃぁという感じでお子さまランチを注文しました。ところが、店員さんは、ばあちゃんにうな重、ボクのところにお子さまランチを置いていきました。二人で顔を見合わせて、逆なのにねと笑いながら交換して、ボクはうな重をとってもおいしくいただいた記憶があります。それにしても、ばあちゃんはどうしてお子さまランチを頼んだんだろう？ボクがうな重を食べきれなかったら、お子さまランチを分けてくれるつもりだったのかな？

もの知りおじさん（ＫＣ）



ひ

秘技(ひぎ)！
お好(この)み返(がえ)しは
「これを…こう！」

【秘技！お好み返しは
「これを…こう！」】

お好み焼きをひっくり返すときの母のかけ声です。真似して自分もひっくり返そうとしたけれど、豪快にぶちまけました。熟練の技にはかないませんね。

ノリノリの海苔（ＨＳＣ）



ふ

ふくらむ
パウンドケーキに、
ふくらむ期待（きたい）

【ふくらむパウンドケーキに、ふくらむ期待】

幼い頃、母がおやつによくつくってくれたパウンドケーキ。焼けるまでには四十分かかるのに、だんだん大きくなる生地が愛おしく、期待をふくらませながら、オーブンの向こう側を何度も何度ものぞきに行っていました。焼けるまでオーブンを開けてはならない緊張感から解放されて、ついに焼き上がったその時、ドアを開けると同時にケーキの甘い香りで心がいっぱいになったのを覚えています。

KM（KC）



へ

へらず口（ぐち）
母（はは）の日（ひ）にくれた
イチゴ
小（ちい）さな手（て）

【へらず口 母の日にくれたイチゴ 小さな手】

とにかく言うことを聞かない幼かった息子が、買い物中ふといなくなり少しして袋を下げて駆け寄ってきました。袋にはイチゴが一パック入っていて、母の日のプレゼントだと嬉しそうに渡してくれました。とてもうれしかったのを今でも忘れません。

はは（SKC）



ほ

北海道（ほっかいどう）の
思（おも）い出（で）は
バケツいっぱい
バフンウニ

【北海道の思い出は バケツいっぱいバフンウニ】

七月、北海道斜里町（しゃりちょう）のユースホステルに滞在中のある朝。雨ですることがなく女三人で掃除の手伝いをした報酬(?)が思いもよらず、バケツいっぱいのバフンウニでした。自分で割って食べたウニは最高においしかったです。鮮やかなオレンジ色と口の中でとろけた味は、数十年経った今でも楽しい思い出とともに記憶に残っています。

まめまめ（KF）



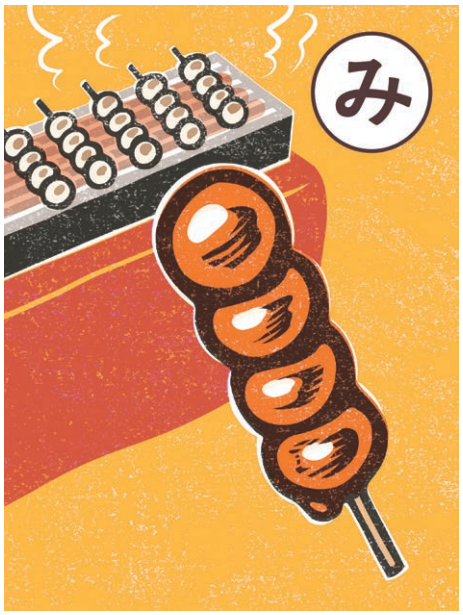
ま

マグロは
赤身(あかみ)が
一番(いちばん)うまい！

【マグロは赤身が一番うまい！】

義父が漁師だったこともあり、よくマグロなどのお刺身をもらって家族で食べていたがまだ小さかった娘が、中トロ、大トロではなく「マグロは赤身が一番うまい！」と義父に言っていました。「通だな～」と笑っていた亡き義父の顔を今でもマグロを食べるたびに思い出します。

YB（HSC）



み

みたらし
焼(や)き立(た)て
至福(しふく)のひととき

【みたらし　焼き立て
至福のひととき】

母の実家が和菓子屋を営んでいます。夏祭りの日は店先で「みたらし団子」を焼きます。お団子を焼いて、熱々のたれにくぐらせます。あまじょっぱい味わいが口の中に広がります！もしこの世の中にこれよりおいしいものがあるのならば、お気軽にご連絡をいただきたい。

あらし（KF）



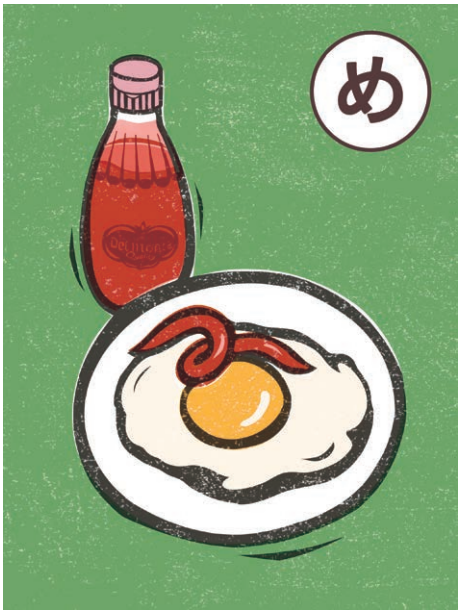
む

麦茶(むぎちゃ)！と
思(おも)ったら
麺(めん)つゆだった！

【麦茶！と思ったら麺つゆだった！】

暑い夏。外から帰っておもむろに冷蔵庫に冷やしている麦茶を一口ゴクッと・・・。またやっちゃった！皆さんも一度は経験あるのでは？悲しくも懐かしい思い出です。

あ～る（NDM）



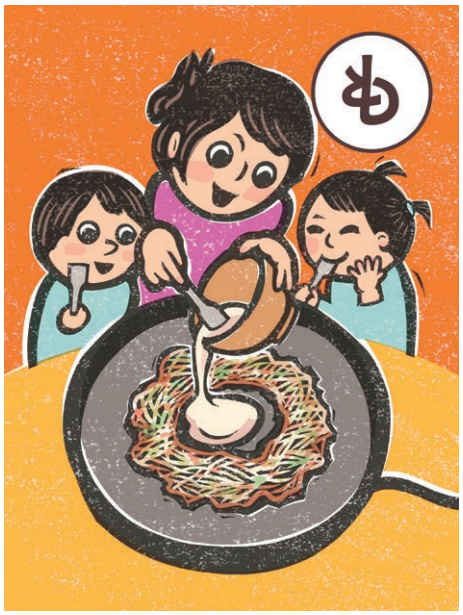
め

目玉焼きは
何派ですか？

【目玉焼きは何派ですか？】

家族も、会社の仲間も、仕事でのお付き合いの人たちも、目玉焼きは、しょうゆ派か塩・こしょう派かソース派かケチャップ派かその他派か好みがまちまち。経験的には塩・こしょう派が多いか…会話で距離を近づけられる一言でもあると思っています。ちなみに、私は会社に入ってからケチャップ派です。

サラダ軍艦（ＫＦ）



も

もんじゃ焼きは
ごちそう！

【もんじゃ焼きはごちそう！】

母は東京の下町育ち。土曜の昼、家族で囲んだホットプレートでもんじゃ焼きをつくるのが楽しみだった。ウスターソースが焼ける香ばしい匂いが部屋いっぱいに広がり、食欲をそそる。ヘラでこそげ取るおこげは、パリッとしていてまるでおやつのよう。ジュウジュウと音を立てる鉄板を囲みながら、笑い声が絶えなかった。最近は自宅でもんじゃを焼くことはなくなったけれど、あの味と香りは今も心に残る、わが家のごちそうの記憶だ。

まっちゃん（ＫＦ）



や

焼鯛
猫との格闘！

【焼鯛　猫との格闘！】

正月料理の準備の中で、子どもだった私の担当は、焼鯛の焼き係でした。鯛に塩をふり、鯛の口から尾っぽにかけて串を刺し、食材の準備は完了。ブロックを左右に並べた真ん中に炭を置き、火をおこします。そして、串に刺された鯛をブロックに渡すように置いていきます。魚の匂いに誘われて、猫が集まり始めますので、焼鯛を奪おうとする猫たちとの真剣勝負です。絶対に負けられない戦いのはじまり。

こむぎヨーキー（ＫＢＳ）



ゆ

ゆでたまご、
半分（はんぶん）こで仲直（なかなお）り。

【ゆでたまご、半分こで仲直り。】

兄とケンカした朝、母が「仲良く食べなさい」と言って、ゆでたまごを半分に切ってお弁当に入れてくれた。お昼にそれを見た瞬間、なんだか笑えてきて、帰り道に「ごめん」と言えた。黄身の真ん中で割れたたまごが、私たちの心をつなぎ直してくれた。母の演出に感謝している。

ヨッツ・マングローブ（ＫＦ）



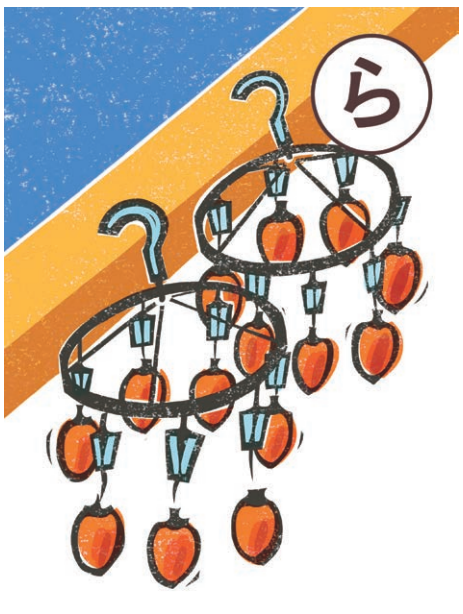
よ

夜（よる）ごはん
寝息（ねいき）をよそに
一人箸（ひとりばし）

【夜ごはん 寝息をよそに 一人箸】

異動したばかりの頃は仕事が多忙を極め、毎晩遅くに帰宅する日々が続きました。それでも、リビングに残る妻と娘の気配を感じながら食べる夜ごはんは、意外にも心がほっとする味わいでした。

Hold Your Chance（ＫＣ）



ら

らんかんに
冬日（ふゆび）を浴（あ）びて
ゆれる柿（かき）

【らんかんに　冬日を浴びて　ゆれる柿】

祖母は、三年前に亡くなるまで、庭でできた柿を毎年干柿にして送ってくれていました。干柿は、柿の皮を剝いてヘタにビニール紐を括り、その紐で物干しハンガーにつるして廊下に干します。柿に白い粉が吹いたらできあがり。その間廊下には柿が干された物干しハンガーが三〜四個並びます。冬になると届く干柿は、洗った発泡トレイに同じ方向にきれいに並んでいて、崩れないようにビニール袋でピッタリ包装されていました。今も干柿の季節になると、廊下で洗濯物のように干されていた柿を思い出します。

たかのこの湯（ＫＦ）



り

りょうないかくり
寮内隔離、
すく
救ってくれた
とも　はいぜん
友の配膳

【寮内隔離、救ってくれた友の配膳】

大学二年の夏休み、私は野球部に入っていたため、週六日の練習でグラウンドを駆け回っていた。そんな中、新型コロナに感染し、寮の一室で十日間の隔離生活を送ることになった。体調は数日で戻ったが、昼に起きてスマホをいじり、眠くなれば寝るだけの怠惰な毎日だったが、唯一笑顔になれる瞬間があることに気づいた。友達が部屋までごはんを運んでくれる時だ。ドア越しに受け取るわずかなやり取りが、孤独を忘れさせてくれた。「今日の練習えぐい、めっちゃきつかった。」「ミーティング長すぎるんだよ！」そんな愚痴を聞くと私はいつもの練習風景を想像し、笑顔になれた。さらに、誰がごはんを持ってきてくれるのかを考えること自体が毎日の楽しみになり、孤独を和らげてくれた。友達が食事を届けてくれる、その積み重ねがあったからこそ、私は隔離生活を前向きに過ごすことができたのだ。

おにぎり（ＫＦ）



る

るんるんきぶん！
イースターきゅうかのタマゴさがし

【るんるん気分！　イースター休暇のタマゴ探し】

欧州では、春のイースター期間に、よくタマゴ探しイベントが開催されます。学校の校庭や近所の公園で、まず大人がタマゴ型カプセルをいくつか隠し、それを子どもたちが探すイベントです。カプセルの中にはお菓子やおもちゃが入っているので、子どもたちは必死で探します。私の娘もタマゴを探すのが大好きで、ドイツ赴任中の週末はよく家の中でも実施していました。しかし、この隠す場所を決めるのがなかなか難しい。当時五歳だった娘は、隠し場所が難しすぎるとすぐイライラしてしまい、逆に簡単すぎるとつまらないと文句を言ってきます。五歳児が、少しだけ苦労して見つけられる場所を考えるのは、なかなか大変でした。しかし、その楽しかった記憶が残っているのか、十歳になった今でも毎年タマゴ探しをしたいと言ってくれます。さて、お父さんといつまでこの遊びに付き合ってくれるかな？

とも（ＫＣ）



れ

れんこんの
あな
穴から
おいしい食卓
のぞきこむ

【れんこんの穴から　おいしい食卓のぞきこむ】

れんこんのシャキシャキ食感が大好きな三歳の娘。れんこんの天ぷらを頬張るときは必ず穴から食卓をのぞきこみます。穴から眺める娘の目には、どんな光景が見えているのでしょう。れんこんを見るたびに娘の愛らしい光景が浮かぶように、娘にも幸せな食卓の光景として記憶に刻まれますように。

はすね（ＫＣ）



ろ

ロック・ザ・
サンドイッチ

【ロック・ザ・サンドイッチ】

大学ではバンド活動に精を出し、スタジオに集まっては音を合わせる日々でした。紅一点のキーボード、A子が「つくってきたよ」と、いつも練習の合間にふるまってくれていたのがサンドイッチ。ツナマヨサンドはカレー粉が加えられて、薄焼き卵サンドはマスタードマヨがアクセントになっていて激ウマ。手づくりサンドで小腹を満たしたあとの練習は、これぞロックだ！という盛り上がり。でもこれには裏があって、メンバー全員、A子が好きになってしまい、アピール合戦だったんです。そしてライブ本番、演奏を終えて決まったな、と思った直後、花束を持ってステージ前に出てきた男性が……なんとこれがA子の彼氏。「俺たちに差し入れしてくれたサンドイッチ、きっと彼氏にも渡してたよね」としょんぼりする僕ら…ああ無常。サンドイッチの味と、「いっちょやるぞ」という気持ちは数十年たった今、何ともくすぐったい思い出になりました。

から揚げは二度揚げ（KC）



わ

わたしの妻の
「料理外交」

【わたしの妻の「料理外交」】

二十五年前、私たちはオランダに赴任しました。当時、周りには日本人がいなく、三歳の子どもを連れて異国での生活に不安を感じていました。妻は、どうやって仲間をつくろうかと悩んでいましたが、料理を通じて外国人の中にとけ込むことを決意しました。最初は、妻の料理を食べてもらえない時期が続きましたが、彼女は諦めずに日本の家庭料理を振る舞い続けました。その努力が実り、次第に彼女の料理は評判となり、ついには料理ワークショップを開くまでになりました。妻の料理は、異国の地で私たちの生活を豊かにし、多くの友人をつくるきっかけとなったのです。二十五年たった今でも、SNSを通じて当時の仲間とつながり続けています。妻の料理がもたらした絆は、国境を越えて今も続いているのです。

アンドレアペシ（KC）



を

ヲタ活としてつくった渾身のキャラ弁☆

【ヲタ活としてつくった渾身のキャラ弁☆】

大好きなアニメの映画上映開始が決まった時に、キャラクターの戦闘服をイメージしたキャラ弁をつくりました！味だけではなく、視覚的にも楽しめるのが料理の醍醐味です。

みぃちゃん（SKC）



ん

んーん、
この味（あじ）
なんだよな

【んーん、この味なんだよな】

お母さんがつくってくれるなすと豚肉とピーマンが入ったみそ炒め。これが小さい時から好物でしたが、他のお店や家では食べたことがないです。料理名もちゃんとないみたいで、わが家の謎メニューですが、久しぶりに食べると「んーん、やっぱりこの味なんだよな」とうれしくなるオリジナルメニューです。

ソラリス（ＫＦ）